

＜書評＞

ユーロピアのマルクスと

人間悪のドストエフスキー

長瀬隆著

『ドストエフスキーとは何か』

成文社 2008 年 7 月刊 定価 4200 円＋税

評者 法政大学名誉教授 岡田裕之

に無遠慮に土足で入りこんで来る。本書の著者長瀬氏は、大学でロシア文学を専攻しつつ学生運動に参加した経験を持ち、チェーホフを研究し、すでにペレヴェルゼフ『ドストエフスキーの創造』みずす書房、1989 年、を訳出しているロシア文学研究者である。本書は、ソ連時代に生きかつ迫害されたマルクス主義に立つペレヴェルゼフの著作を基礎に“二重人＝二重人格”の概念を提出し、これを展開して複雑かつ膨大なドストエフスキーの全作品を総合的に理解しようとする野心的な著作である。

1973 年、私はまだ雪の残る 3 月末、モスクワ市内北部にあるドストエフスキー通まで市電に乗り、少し探して作家の生まれた病院の一角に小さなドストエフスキー記念館を見つけた。薄汚れた木造の街並を敷居が鞭を当てる馬車で荷物を運んでいる光景はまるで 19 世紀に戻ったかのようだった。「日本の方ですね。日本人とフランス人がよくお見えになります」。目の前に『悪霊』の自筆原稿があった。美しくもあまりにも整った筆跡に驚く。彼の小説といったら複雑極まりなく、人物の筋のつかみにくい長舌から乱雑な筆跡を想像していたからだ。そして逆に理路整然たるマルクスの読みづらい書きなぐりの草稿を思い浮かべると、病院の庭にかなり巨大なドストエフスキーの彫像が立っていた。やや猫背に悲しい憂鬱な眼でモスクワの町を、ソ連を、見下ろしていた。

ドストエフスキー全作品と“二重人”の概念

青年期にドストエフスキーを読んで魂を抉られた覚えがある人は少なくないだろう。ギリシヤ悲劇はあまりにも象徴的であり、シエイクスピア劇またいささか遠景の古典の風格が先行する。だがドストエフスキーは身近にいて、表には出したくない心の非合理的暗闇

本書の出発点は“二重人”の概念である。これは作家の初期の著作『二重人格』(小沼訳)または『分身』(米川訳)に由来するもので、この作品の主人公下級官吏ゴリヤートキンツ氏が長官令嬢と結婚して惨めな身分を抜け出す計画を立てるのを、新ゴリヤートキンツ氏(分身、二重人格)が出現して旧ゴリヤートキンツ氏の計画をことごとく妨害し、旧悪を暴露し、新ゴリヤートキンツ氏が旧ゴリヤートキンツ氏を追い詰める、という筋である。これがペテルブルグの裏町にうごめく屈辱と尊大に苦しむ分裂する人間と階級社会の造形であるのは言うまでもない。長瀬氏はこれを“二重人”と表示するが、適切である。ペテルブルグ下層民ないしは貧しい青年の屈辱と尊大の分裂症状は『罪と罰』のラスコリニコフに明らかだが、“二重人”は処女作のワルウーラ(『貧しき人々』)から地下人(『地下室の手記』)を経由し、ヌタゾローギン(『悪霊』)、ヴェルジエロフ(『未成年』)を経てイワン(『カラエーゾフの兄弟』)に至る。

ペレヴェルゼフは“二重人”を一人の人格分裂からラスコリニコフとソニヤ、『白痴』のラヂージンとムイシユキン、『悪霊』のトヨートル、ヌタゾローギンらとシヤートフ、『未成年』のヴェルジエロフとマカール、と『我意の人』と『温順の人』の分裂対立へ展開す

る。ドストエフスキーの作品は一般に前期の諸作品と後期の長編小説に二分して論じられるが、長瀬氏は“二重人”の連続とともに、後期における「革命と悪魔」が主題の『悪霊』、父殺し、ツアー殺し、キリストが主題の『カラエーゾフの兄弟』においては“二重人”がそれぞれイデオログの思想分裂として展開されている、と説明する。後に見るように、前期と後期の連続と非連続について評者は独自の見解を持つが、“二重人”、人格分裂の病的症状、の主題の一貫性とともに、後期におけるキリスト問題、社会問題の思想性はその深みから言ってこれとは断絶した面をもつ。この後期長編小説の重みこそドストエフスキーを言語芸術(文学)史上の天才たらしめている。

この前期から後期への展開のキー概念が『地下室…』における“石の壁”である。40 歳の下級官吏である地下人——主人公は無名——は全編モノローグの前半において、「美と崇高と理性、2×2 が 4」の啓蒙を呪い人間は「破壊と混沌と恣欲を求めろ」と宣言する。しかし事實は彼は“石の壁”に埋め込まれて地下を出られず、「地下万歳！」で社会集団に虫けらのように無視され辱められ、しかもこの屈辱を「単しく甘い快楽」のように味わう。『地下室…』の後半では、地下人は、同じように惨めな娼婦にいったんは同情するが、誘った娼婦がいざ苦界の脱出を求めて彼を助けると彼は哀れな娼婦を虫けらのように拒否し侮辱する。この“二重性”を強制する“石の壁”こそ帝政(ツアー・神・父)だ、と長瀬氏は読み解く。このように読み解くと、前期の作品と後期の 5 つの長編が“二重人”とその“イデオロギー的展開”となって結び付けられる。

後期の長編小説を読む——革命<人神>かキリスト教<人神>か

このようにドストエフスキーの全作品を総合的に理解しようとする著者の意図は成功している。長瀬氏は『…兄弟』を作家の最後で最高の傑作とする。後期に“二重人”を明示するのには『未成年』であるが、『二重人』を起点に、ツアー殺し、父殺し——“石の壁”への突進——を媒介に、『…兄弟』が終点となる。

ところで長瀬氏は、本書の後半で後期長編小説の各論に移り、『罪と罰』論ではキリスト教を、『白痴』論ではマルクスとエンゲルスの新約黙示録論を、『悪霊』論では悪魔と革命を、『未成年』論では二重人を、『…兄弟』論では父殺し、ツアーリズムを論じる。そして最後に、西欧・ロシアのキリスト教絶対唯一神を日本の密教の立場からいかに相対化するか、に触れて本書を閉じる。だが、著者がドストエフスキーとマルクスをキリスト教、革命、帝政(ツアーリズム)と聞わらせつつ論じるとき、そこにはマルクス経済学(貨幣論)についてもエダヤ教=キリスト教史についていともいささか素人談義が多いように思われ、前半に比べて説得力が落ちる印象を受ける。そこでこれらをあげつつもあまり意味がないので、固有の文学論からは多少離れるが、マルクスとドストエフスキーの歴史的で預言者的な意義を評者自身の観点からここで述べてみたい。労働運動に関心ある本誌の読者にはこの方が本書の中心点を理解し易いのではないだろうか。

マルクスもドストエフスキーもともに矛盾に満ちた悲慘な人間社会の救済を求めた。そして前者は宗教を否定してプロレタリア世界革命(至福千年王国)を目指し、後者は無神論の革命は抑圧と奴隷化に帰着すると見て善と悪、神と悪魔、愛と憎の解き難い人間の分裂を造型した。評者は、青年時代に第二次大戦を体験しつつ戦争の原因を資本主義の矛盾に求め、平和と自由をマルクスの共産主義革命に期待して『資本論』をバイブルの如く崇め共産党に入党し、活動した。だが私はそこ

で、組織に属する知的な友人たちが同志へのスパイ容疑と査問のテロ行為を繰り返し、ついに評者自らか親しい友人を裏切つて査問にかかわる破目にしたった痛切な体験を経た。運動の最後には『資本論』ではなく『悪霊』だけが「救い」となった。こうして共産主義運動と『悪霊』体験は不可分なものと覚った。

後期ドストエフスキーの主題はキリスト教と殺人である。『未成年』は例外的に「ハッピーエンド」であるがあくまでもカッコ付きで、劇的な殺人未遂のエピソードにすぎない。それは女殺し、愛人殺しで『白痴』を受け、潜在する父殺し(女の奪い合い)、反パトリ・コミュニケーションとニヒリスムの思想対抗で「…兄弟」への伏線となる。作家は後期ソリエズにおいて愛の裏に潜む憎を、神と共生する悪魔を、反キリスト者が求める神を暴き出して人々の魂を揺さぶる。ペテルブルグ大学法学部の秀才ラスコリニコフは人間を「英雄ナポレオン」と「悪に生きる風」に分け、高利貸老婆を殺し、自分と妹を救つてその後に「英雄の高貴なる行為」で社会に報いようとする。しかし犯罪は暴かれ思わざる殺人に元学生は苦しみ自白する。彼を更生させるのは虐げられ嫌れた毎日を送るキリストへの祈りに頼る無力な娼婦ソーニヤである。人間を殺す側と殺される当然の側に分け、自分は殺す側に立つ「前衛」とは何であるか。

『悪霊』は、1869年のネチヤヤーエフによるモスクワ大学でのニヒリスト学生殺害事件の実際を造型した小説である。この革命家集団は、不具の妻を殺させ犯した少女の首吊り自殺を冷やかに観察する頭領のスタヴロギン、密告を疑つて同志シャートフを見せしめに殺し「インターナショナル」の団結を強化する組織者ピョートル、自ら神になるために自殺する思想家キリロフ、あらゆるユーロピア社会主義をこき下ろし「無限の自由から出発して無限の専制主義にいたる以外に新

しい社会形式はない」と予言する革命家シカリョフ、と悪霊に憑かれた虚無青年たちから成る。彼らは自由主義の親が育てた子供たちだった。「悪鬼、人を出でて豚に入りたれば、その群、崖より湖に墜け下りて溺れて死にたり」(ルカ伝)。「白痴」は神の普遍愛に生きる無能な善人、<人神>ムイシキンズの嫉妬を描き、『悪霊』は神に代わつて救済を掲げる<人神>の革命家の嫉妬を描く。

『…兄弟』は犯罪の極点に父殺しを描え、残酷で淫蕩な老父と父に殺意を抱く三人の兄弟を配置する。惨劇は起り、老父フョードルと女と金を奪い合った長男ドミトリーが逮捕され、ツアール殺しに擬せられ有罪となるが、実行犯はフョードルの私生児、家僕ヌマルジヤコフであった。ヌマルジヤコフは殺害は次男イワンの寄託を受け意思を代理しただけだと囁く。思想家であるイワンはかねてから神を否定し、「神がなければすべてが許される」と説いていた。イワンの思想の圧巻は劇中劇の「大審問官」にある。15世紀ヌベインで異端審問の殺戮に苦しむ民衆に自由を与えて救うべくキリストはヌベインに現れるが、大審問官に捕えられる。大審問官はキリストに消えろ！言う。「人民は暴徒であり、悪魔の三つの誘い(ルカ伝、マタイ伝)、すなわち、パンと柴草と奇蹟を求める。彼らには自由は重荷だ。キリストは大審問官を祝福して静かに去る。

末弟アリョージャはキリストを信じて僧院生活を送り、二人の兄とかわりながら惨劇をみつめて神への不信心に反論する。アリョージャは町の少年の群れと行き来する。少年たちは貧しくとも明るい。これは作品の中の救いであるが、その含意は両義的である。この「世代」には将来の革命家を思わせるクラフトキンがおり、全編は彼の「カラマゾフ万歳！」で終わる。長編ながら息もつかせぬサスペンスに人間善と悪、内面に潜む<人神>と神人の弁論が織り成すこの作品は、

言語芸術の一つの最高峰である。

後期をこのように読むと、前期は救済を求める同時代ロシアの悲慘を描いていると解することができる。人神か神人か、殺人と革命かキリスト教の思想的対立と分裂は、この19世紀帝政ロシアの悲慘からの脱出を渴望する「世代」の苦悶であった。

ワルケスの予言とドストエフスキーの予言
20世紀は「世界戦争と世界革命の時代」であったと振り返ることができる。この歴史のうちに滅びた悲運の人々は幾千万人、幾億人とどれだけの数であろうか。あるものは戦場で戦死し、あるものは強制収容所で生命を絶つた。世界戦争の悲慘から「パンと平和と平等」を求めて脱出しようとしたロシア革命の結末はどうであったか。革命を指導した党派はニヒリスト、つまりナロードニキ(『人民の意志・自由』派)でなくボルジエビキ(ワルケス主義者)だったが、人民の意思・自由は共産党独裁において実現され、共産党独裁はスターリン独裁に帰結して千万単位の飢餓・追放・投獄から奴隷収容所に至った。ソ連の体制は革命にもかかわらず、否、ワルケス主義の革命によつて、資本主義に敗北し、1991年、体制を清算して資本主義に合流した。ロシア正教会は復活した。ワルケスの予言も『悪霊』の予言も実現した。評者の運動体験は民間山荘事件にも及ばない小さな体験にすぎない。だがいかに小さな個人体験であっても、それは世界史の体験の一部分であった。

命が人間悪に媒介されるときは恐怖を造型した。天国は地獄に帰着する。では神人か。彼は分裂と動揺のうちに回答できない。「二重人」は、評者のように「救済をどう悲慘の前期」と「救済を求める構想の後期」の連続と非連続における<人神>と神人との劇的な分裂と読み直すとき、いっそう適切な仮説となるのではない。資本主義社会の矛盾と悲慘が続く限りは「ユートピア」を求めざるを得ない。だからそれを神に委ねることはできない。同時に悪魔を内在させる人間による「革命」は常に危険である。フランス革命もロシア革命も恐怖に終わった。人は神=絶対者たり得ない。

本書に立ち返ろう。評者は先に述べたように長瀬氏の「二重人」仮説に賛成である。だがこの「二重人」の概念は<人神>か神人かとの分裂においていっそう劇的となり、深刻になるのではない。後期において「二重人」は『未成年』を除いては同一人の「分身」としては現れない。それは『罪と罰』においてラスコリニコフ、ソーニヤ、ヌガイドリガイロフの三人劇の構成となり、『悪霊』においては革命家集団や盗賊、作家、地方政治家の集団劇となり、『…兄弟』においては血を分けた同胞の四人兄弟に僧院の僧や少年群の多数が集団劇と世代劇に登場する。分裂するのはたしかに個々人だが、それ以上に分裂するのは集団であり時代であり世代でありロシア社会なのである。社会科学に携わる評者の議論が文学研究者の議論にどこまでかみ合うか自信はないが、これもワルケスとドストエフスキーを同時に扱った本書を推奨する議論である、とご理解いただきたい。

日本人として

最後になったが、ドストエフスキーをどう読むかとともに絶対唯一神の宗教を根底に置く西欧思想を、心に仏教の根づく日本人がい

かに学ぶか、批判するか、の問題が残る。日本近代文学は二葉亭四迷以来ロシア文学から多くを学んでいるのだが、長瀬氏はまず密教の観点からこれにアプローチする。これも議論が紛糾するところである以上は立ち入れない。ただ著者はチエーホフの専門家でも

あり、チエーホフの中庸を愛する、と書いていることは特記しておきたい。ドストエフスキ―は鋭く善か悪か人間性を極限に突き詰める。この執念は日本人が「学ぶべき」であろうけれども、「親しめない」かも知れない。 2009/02/22

＜書評＞

迫真の危機描写、生の讃歌

吉田勝次著

『癒す力―がんの患者学入門』

らんげん出版 08年12月刊、1600円＋税

評者 志保田 行

危機の最中にある人が、隠さず、偽らず、自分の陥った危機の実情を記録するというのは、当然の理由によって、非常に難しい。著者はその難事に成功している。

「私のがん告知を受けたのは、2004年12月だった……

……茫然自失して、なにか言いようのない恐怖感に体全体が包まれたことは覚えていいる。ある種の急性ショック状態でも言うべき身体的変化が私を襲った。足がガクガクして妻の手を握らなければ立ちあがることができなかつた。手に握りしめていたハンカチが汗でグシヤグシヤに濡れた。手が震えてノートに医師の言葉を書き写すことができなかつた。手が震えて字の書けない状態は、3か月以上続いた。顔は極度に緊張し、ひきつり、死相をただよわせていたに違いない。外の世界に対する関心そのものが一気に喪失した。毎朝、何種類かの新聞を丹念に読むという長年の習慣は、嘘のように消え去ってしまった。新聞など振り向きもしなくなつた。」(p.18)

「検査室に入っている人らは私と同じように不安そうに、しかもおどおどしているように見える。いずれも人生のベテランと言ってもいい壮年の人たちが。臓器というパーツの修理については高度の技術をもつ修理工たる医師が患者の前に座り、X線写真をずらりと並べ、何十項目かの血液検査の結果をながめて『術後の3年生存率は何パーセント、5年生存率は何パーセント』と厳肅に告知するのである。専門知識と経験から言えば、おそろしく例外なく、すべての患者はたまたきのめされるだろう。

震える患者

彼は医師が患者にくだす告知の冷酷さを指摘する。

絶望は、心と身体に破壊的なインパクトをもたらす。病氣そのものではなく、絶望が、患者を息も絶えだえにするのだ。」(p.21)